

2025年8月30日

世界の人びとのための JICA 基金活用事業 終了時活動報告書（2024 年度採択案件）

1. 業務の概要	
(1) 案件名	学習に遅れがちな生徒の保護者への支援 (Parent education)
(2) 実施団体名	ディーヨ フォーラム JAPAN
(3) 実施期間	2025 年 2 月 10 日～2025 年 7 月 31 日
(4) 実施国	ネパール
(5) 活動地域	シンドウパルチョーク郡 スンコシ No. 1 及び一部 No. 2
(6) 活動概要 ① 活動の背景： 実施団体の代表者は 1991 年に JICA 海外協力隊としてネパールで活動した。当時、少数民族の保護者を対象に、教育の重要性を伝えることを狙い、識字教室を実施した。村人からの識字教室継続の要望が大きかったことから、村人と共に、現地に NGO「DIYO FORUM（ディーヨフォーラム。DIYO はネパール語で「ともしび」の意味）」を組織した。この NGO の活動は、職業訓練、女子生徒のための奨学金支援、通学が困難な生徒のための学生寮提供、障害をもつ人々の収入向上のためのカレンダー作成支援など、ネパールの社会的弱者への教育支援をテーマに 30 年以上続いている。 近年ネパールでは、高校を卒業すると労働や進学先を求め、村から都市部へ、都市から外国へと移動する若者が急増している。一方で、村に残るのは、学力や経済的な理由で進級・卒業・進学できなかった若者、障害をもった人々、少数民族等であることも課題となっている。残された人々が将来的に村の運営を担うことになるため、教育の普及は重要である。特に就学率や学校での学習効果を上げるために、学習の習慣化を図り基礎学力を向上させることは村にとって重要なことである。 このような背景から、現地 NGO「DIYO FORUM」は、2018～2019 年に対象地域にて、学習に遅れがちな生徒を対象に、短大・大学生が個別指導するプログラムを実施した。生徒の 7 割程度に学習状況の改善が見られたものの、改善が見られなかった生徒については、家庭学習の習慣が定着していない、保護者が子どもの教育や学びに関心が薄い、子供への働きかけが弱い等の共通点があった（現地学校長の分析）。今回の JICA 基金活用事業では、この家庭での学習環境改善に焦点をあて、村の中心にある高校と周辺にある小学校が連携し、学習に遅れがちな生徒及びその保護者に絞って支援することにした。 ② 活動の目標： ・ 学習に遅れがちな生徒と保護者に学びの大切さを理解させる ・ 生徒に家庭での学習習慣の定着を図る ・ 保護者に子供に接する態度の重要性を理解させる ・ 保護者に家庭の学習環境整備の重要性を理解させる ・ 保護者と教師（家庭と学校）とで協力関係の構築を図る	

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

現地団体「DIYO FORUM」およびトカルパ村の複数の学校と打ち合わせ、家庭訪問・指導を行う対象生徒とその保護者を選定した。2025 年 2 月～3 月に、訪問を実施する指導者への講習会、対象の保護者への説明会・講習会を実施した。その後月 2 回（4 か月間）のペースで、居住地域に指導者が訪問し、対象保護者・生徒への指導を行った。

① 家庭訪問対象者の選定

事業対象者選定のため、2025 年 2 月下旬から 3 月上旬にかけ、トカルパ村 No. 1 地域の 3 つの学校が「学習に遅れがちな生徒や欠席の多い生徒」をリストアップした。各学校が選定した生徒とその保護者を、住居のある地域別に再編し、それぞれに 4 名の訪問指導者を割り当てた。対象となった家庭へは、各学校から生徒を通し「保護者の出席案内」が通知された。

② 訪問指導者の選定

訪問指導者とは、事業実施団体である現地の NGO ディーヨ フォーラム スタッフと共に家庭訪問を行い、保護者と子供の個別指導を行うメンバーのことである。指導者として、各学校や地域での指導経験のある元小学校教員 4 名を現地 NGO が選定・依頼した（事業途中で、村の大学に通う少数民族出身の大学生 1 名を追加）。豊富な教育経験があり、本事業で対象とする保護者との友好な関係を築いていることが選定の理由だった。

③ 訪問指導者講習会（1 回目）

4 名のうち 1 人は、1991 年に識字教室を実施し、少数民族を深く理解している人でもあった。4 名ともカースト上位に位置し、プライドを持って指導に当たった。身分制度が根付いている村では、接し方次第では、保護者と指導者間に壁ができることも想定された。事実、本事業前に学校長の 1 人から、保護者への呼びかけや電話を拒否されたという話があった。そこで、訪問指導者講習では、「相手の話を聞くこと、課題把握に努めること、少しでも改善が認められたら褒めること等」、相手の自尊感情を高め、良好な関係構築のための対応方法を具体的に伝えるようにした。また、講習会の回数を当初の予定より増やし、丁寧に指導した（2025 年 3 月 1 日実施）。

④ 訪問指導者講習会（2 回目）

1 回目の訪問指導（2025 年 3 月）の際は、指導者の保護者への接し方について、簡単な伝達にとどまった。訪問指導での適切な接し方は、本事業の成果に関わる重要なポイントとなる。そこで、望ましい接し方に気付いてもらいたいという狙いで、保護者や子どもへの事後アンケートの作成に訪問指導者も関わってもらうことを計画した。アンケート作成の手順は、まず、訪問指導者の講師（本事業のカウンターパート NGO 関係者）2 人と日本側 1 人のそれぞれがアンケート原案を持ち寄る。次に、原案には否定的な質問や目的から外れた質問も含まれていたため、日本側がより目的に沿うような質問を提案するという行程を繰り返し、修正案を用意する。最後に、訪問指導者講習会で、訪問指導者が修正案から、望ましい質問を選んで完成させていく手順であった。狙いは、訪問指導者が、修正案を比較検討していく過程で、望ましい接し方の気付きを促すというものだった。この過程で、現地の考え方を日本側が学び、互いに理解し合いながら、目標に向

かうという作業を行うことができた。この成果として、講師の1人が、講習会の重要ポイントを理解し、「Guidance for facilitators」という資料を提示してきた。（2025年3月7日実施）

⑤ 保護者講習会（1回目）

2025年3月8日バルシクシャ小学校、2025年3月15日ラクタカリ小学校とバグバイラブ高校で実施。次のテーマをとりあげた。

- ・ 生徒とその保護者が訪問指導の目的を理解すること
- ・ 保護者の協力を促すこと、保護者の子供に対する関心を高めること
- ・ 保護者が子供を一方向的に叱るのではなく話を聞くようにすること
- ・ 叱るよりも褒める肯定的な接し方をすること
- ・ 保護者が家庭の学習環境の重要性を理解し改善に目を向け子供の家庭学習を支援すること

⑥ 家庭訪問指導

2025年3月上旬から6月中旬まで、定期的な8回の訪問に、指導者個別の追加訪問が加わった。対象生徒56名、家庭50軒を訪問した。生徒には事業開始時に、1人1冊の日記帳を渡し、その日の全てのようにすを記録するように伝えた。指導者が複数回家庭訪問し、日記帳の確認を通じて、生徒の家庭での学習状況を把握するようにした。保護者や学習環境等の様子は、訪問者による観察、保護者との面談や子どもとの対話を通じ把握した。実際に訪問すると、学校が把握できていないような以下のような課題が見えてきた。

それぞれに学校では見えにくい個別の問題を抱えていることが分かった。訪問指導者は、生徒や保護者に、優しく、朗らかに、肯定的な対応をした。一部の生徒は突然の訪問者に警戒の表情を示し、距離を置いた。しかし、次第に表情は明るくなり、距離が縮まっていった

- ・ 親や保護者の問題として、出稼ぎ等のため親が家にいない（犯罪による父親の収監された例）、子供への関心が低い、夫婦間の不和、父親による母親への暴力、両親の離婚（父親が新たな女性を連れてくる、母親が家を出る）等があった。それらの結果、子供は祖父母宅に預けられるケースが多数あった。
- ・ 家庭環境の問題として、親が子供に学習より仕事を優先させる状況、子供の学習場所・時間が配慮されない状況（親は家庭学習できる時間はあるとの認識）、肉体労働による疲労で学習に行きつかない状況、家に照明やランプがない等があった。
- ・ 子供の問題として、友人との遊びを学校より優先してしまう状況、携帯電話によるSNSやゲームに耽る（依存する）生活、対人恐怖から心を閉ざす（人を避ける）行動、明確な理由はないまま日記を書かない状況等があった。

⑦ 保護者講習会（2回目）

2025年6月7日バルシクシャ小学校、6月14日ラクタカリ小学校とバグバイラブ高校で実施。事業の成果を測るためアンケートを実施した。アンケート結果は後述する。

⑧ 学校関係者・行政（村長・首長）との意見交換

2025年6月15日、訪問指導で得られた生徒・保護者の情報を共有するため、対象地域にて、NGO・学校関係者・行政（村長）首長との会議を行った。会議では、現地NGO関係者や訪問指導者の気

付きを、学校側に伝える機会になった。報告の中には「成績の低い生徒への気配りの重要性」や「保護者との対話から見えてきた家庭学習が難しい理由」なども含まれ、学校や行政が把握できていない生徒や保護者の情報を共有することができた。これに対し、学校関係者の1人は、本事業を「これまでにない画期的な取組であり、先進事例になる。他の学校から同様の取り組みを行って欲しいと問い合わせが来ている」と話していた。NGO 関係者（本事業のカウンターパート）も、「本事業は他の団体が実施したら今回より多くの費用がかかるだろうが、少額で実施できた」、「この額であれば、海外からの支援に頼らず、ネパール国内の資金でできるだろう」という前向きな意見もあがった。

（２）実施成果：

事後に保護者・生徒のそれぞれにアンケートを実施した。質問内容は、事業の目的・目標に関連した内容とし、訪問指導実施前と後の状態を同じ質問で回答してもらった。回答は4択（強い肯定、弱い肯定、弱い否定、強い否定）とした。事後の回答の変化から事業の効果を評価できるようにした。質問項目の多くに、肯定的な回答（ポジティブな変化）が得られた。下記にその一部を紹介する。

① 保護者の変容

＜子供（自身の子）との接し方＞

- ・ 子供と話すようになった／子供の話を聞くようになった
- ・ 子供を叩くことが減った／子どもを叱ることが減った
- ・ 子供が直面している問題に興味を持つようになった／理解しようとするようになった

＜子供の家庭での学習環境について＞

- ・ 家庭学習環境は子供の学習・学校への出席状況に影響すると思うようになった
- ・ 子供が家庭で宿題をしていることを褒めるようになった
- ・ 子供の学習状況について学校の先生と話したくなった

＜訪問指導を受けることについて＞

- ・ 現地 NGO が子どもに日記帳を与えることはよいと思う
- ・ 訪問指導者が家に来て会って話をしたとき、良いと思った
- ・ 子供の勉強を手伝うために訪問指導者が自宅に来るのは必要なことだ

② 子供の変容

＜生徒自身の学校、学びについてのとらえ方＞

- ・ 学校に行きたくなった／学校に行くことは必要だと感じるようになった
- ・ 自宅で学習する時間が増えた／学校で出された宿題をするようになった
- ・ 授業中に分からない/理解できないことを先生／クラスメートに質問するようになった
- ・ 携帯電話に費やす時間が減った／ゲームをする時間が減った

＜親子関係の変化＞

- ・ 両親と話す回数が増えた／学校について話すようになった
- ・ 両親が自分を理解しようとするようになったと感じる
- ・ 両親が自分に家で勉強する時間を与えてくれるようになった

上記の結果を分析すると、家庭訪問および訪問指導を行った多くの保護者・生徒に、行動や意識に改善がみられたといえる。訪問指導に対する受け止めも肯定的な評価がほとんどであった。特に、保護者の態度が「叱る」から「褒める」へ変わり、これが子供にポジティブに伝わったことは大きな成果であると捉えている。

当初、対象地域の保護者らは「叱ることは必ずしも悪いことではない」と認識していた。これに対し、保護者講習会では「子供を叱ったり、殴ったりしないように」と伝え、訪問指導者講習会でも「少しでもよくなったら（20%の改善でも）褒めるように」と指導した。叱って効果があるのであれば、これまでに登校・学習状況は改善しているはずで、叱ることは必ずしも有効ではない、と説明した。保護者に「重要なことは、親が認識する課題を子供に叱って伝えるのではなく、親が子供の抱えている課題を聞き出し、明らかにし、理解することである」と伝えた。訪問指導者にも同様の方針を伝え、生徒・保護者に繰り返し指導を行った。このような指導が功を奏したのだと分析している。

（３）得られた教訓など：

① 自発性は現地に残る財産になる

本事業で活躍した訪問指導者（元教員の地域住民）へは、計 8 回の訪問指導に対しての手当金を支払うことを計画していたが、実際に訪問が始まると、8 回の訪問では予定していた軒数を回れない事態が生じた。広い範囲を登山しながら訪問するには労力と時間がかかること、加えて、5 月頃から始まる雨季には、生徒・保護者が日中に農作業等で外出してしまい、訪問指導のできる時間が制限されてしまったためだ。すると、訪問指導者らはそれぞれ自発的に、手当金なしで自身の空き時間を利用し、追加の訪問指導を始めた。ノートや鉛筆を自費で購入し、訪問先の子供に渡す指導者もいた。これまでネパールで 30 年以上支援を続ける中で、現地の支援者について「言うは易し行うは難し」の故事のように、「口ではやるべきと言うが、行動に至らないこともありがち」と感じていたこともあったが、これが覆された嬉しい出来事であった。

訪問指導者は退職した教員である。彼らは今回の事業に対し「訪問指導はお金が出なくてもやりたい」と話しており、その姿勢は最後まで変わらなかった。彼らのやりがいと本事業の活動がかみ合い、地域住民として貢献できる機会を得られた喜びを感じていたように思う。外部からの支援があつての行動ではなく、自発的で持続性のある行動が、現地に残る財産になっていくことを、改めて痛感した。

① 記述式アンケートの難しさ

本事業では、学習に遅れがちな生徒とその保護者の抱える課題を明らかにすること、行った訪問指導に効果を評価する目的で、アンケートの実施に取り組んだ。しかし、1 回目は失敗に終わってしまった。編集用パソコンや印刷機を学校側に善意で提供してもらった経緯もあり、学校側主導でアンケートを作成した結果、記述式の質問ばかりになってしまったことが主な要因だった。

記述式の質問がうまくいかなかったことは、保護者の殆どが非識字者だったからである。読み書きができない保護者は、記述回答ができないため、誰かが間に入り質問を分かりやすい内容で伝え、回答を代筆せざるをえなかった。多くの場合、それはアンケートを配布した訪問指導者であったが、その結果、指導者自身の考えが保護者の回答に影響してしまう可能性を排除できなくなってしまった。例えば、日常使わない概念的な言葉（単語）の理解は保護者に難しく、意味を理解していなくても、指導者の問いかけや説明に「そうです」と回答してしまうシーンもあった。

この教訓を生かし、2 回目の終了時に実施したアンケートでは、日本側支援者の発案で、プロジェクトチームで印刷機を購入し、シンプルな語句選択式のアンケートを作成した。その結果、指導者の説明がなくても保護者は回答選択することができるようになった。

③ 現地側との対話の継続が鍵を握る

対象とする生徒の選定に際し、学校側が選定した生徒数が訪問可能な数を超えていたため、再選定が必要となり、現地 NGO「DIYO FORUM」の主導で 4 年生以上 9 年生までを再選定した。理由は「生徒への宿題として日記をつけることを考えており、低学年では課題の日記を書けないため」だった。これが功を奏し、生徒がつける毎日の日記は、文字・文章の習得、生活習慣把握、家庭学習習慣の定着、生徒・保護者と連携を図る上で非常に効果的であった。状況をよく知る現地側担当者の日頃の観察眼の鋭さに感心した。

実は、日本側の団体である「ディーヨフォーラム JAPAN」は、学習環境が定着していない 1～3 年等の低学年を対象に含めることもよいと考えていた。実際に、訪問指導を始めてみると、学年が上がり数学・理科・英語の教科に苦戦している 4 年生以上の生徒、試験に落第したり留年したりする生徒が出ている実態が明らかになってきた。しかし、小学校退職教員では、該当科目の指導が難しいことが分かり、対応は不十分だった。指導可能な範囲の把握が、事前に現地側との協議でなされていれば、よりよい事業となったかもしれない、この点は反省点であった。

現地に常駐していない日本側の支援者は、地理的な面で現地把握や事前準備には限界がある。日本側が目標設定することも大切であるが、それ以上に現地の関係者たちが活動の必要性を感じ、自発的に頑張ろうと思うかどうかことが重要である。彼らが課題や必要性を感じていなければ、実現することも難しいからだ。このハードルを超えるために必要なことは、現地のカウンターパートや協力者たちと日本側プロジェクトチームの対話の継続であろう。日本側が、現地の実情に即した対応や現地から学ぶ姿勢をもって、対話していくことが、活動の活性化や効果的な結果につながる鍵を握っていると考える。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

本事業を通じて、学びの遅い生徒の家庭がそれぞれ抱える問題について、訪問指導の効果もあり、意識や行動の改善がみられた図られた生徒・保護者がいる一方で、改善には限界があると感じたケースもあった。例えば、衣食住が満たされていない環境下の子供や日中の労働で体力を消耗してしまう子供にとって、家庭で学習するという行動のハードルは高いと感じた。訪問指導者の中には自身が苦学生であった経験を持つ者もいるが、その訪問指導者や現地 NGO 関係者でさえ、「子供を親から離し、衣食住を提供できる保護施設をつくるのがよいのでは」との思いに至るほどだ。貧困に苦しむ生徒・保護者への対応については、本事業のカウンターパートである「DIYO FORUM」のような小さな NGO や学校単体では手に余ると感じた。そうした家庭については、行政機関からの支援がある社会になって欲しいと思う。すでに、NGO や学校関係者と、村長レベルの首長にはこのような状況を報告したが、今後も、行政との連携を進められるかどうかを注意深く観察したい。

トカルパ村での家庭訪問の事業が、よき成功事例となって、来年も継続したり、他の村や学校に広まったりすることがあれば、これより嬉しいことはない。ディーヨフォーラム JAPAN は現地 NGO と連絡を取りながら、引き続きこのような自律的な動きを後押ししたい。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

- 今回の事業には学校の協力が不可欠であったが、事業を開始したばかりの4月中旬に首都カトマンズで公立教員のデモが行われ、村の教員もデモに加わっていた。このため、1カ月弱の間、授業はもちろん、生徒の進級に関わる再試験も実施できず、本事業も学校との連携がとれない状態となった。事業対象地域であるトカルパ村の山の中にも、私立学校の送迎用バスが入るようになり、20名程度の生徒が村外の私立学校に通い始めたという話である。農村部においても、お金さえあれば、公立ではなく私立学校へ通う生徒が増えてくることが予想される。これまで以上に、地方部での教育格差、そして農村部における公教育の質の確保が問われる時代になってきたと感じた。
- 今回事業対象とした村に暮らす少数民族であるパハリ族へは、現地 NGO が長年識字教室を実施してきた経緯がある。このため、ある程度は識字率が改善していると捉えていたが、1回目の保護者講習会に集まったパハリ族の保護者殆どは、残念ながらいまだに文字の定着に至っていなかった。NGO 関係者は、一時的に習っても、日常で使わなければ忘れていくのだ、と支援の難しさを痛感していたようだった。何世代も続く非識字者の悪循環を、現世代で終わらせるような取り組みが必要だと、改めて感じた。
- 本事業で、「学びの遅れている子」を訪ねて、ネパール農村部の村々を訪問して分かったことは、両親の不和・離婚、育児に関心が低い親、携帯電話でゲームや SNS に時間を費やしている子供たちが多かったことだ。これは日本の子供が抱える問題と共通すると感じた。ネパールというより、国の枠を超える子供の発達段階における共通した課題なのかもしれない。
- 日本だけでなく、ネパールの村落部でも、急激な少子高齢化が進行しており、数年の内に村の学校には存続の危機が訪れると推察する。村に残る人材の育成がこれまで以上に必要になってくるだろう。これについて、学校の教育方針も変わらなければならないと考える。生徒数の多かったこれまでは、中途退学する生徒がいても気にせずいられたが、一人ひとりの学力の向上を大切にしなければならない。こうなると、成績優秀者のいる上位層に焦点を合わせた授業、教師から生徒への一方向の指導では、学習に遅れがちな生徒はなくなる。学校側の、生徒や保護者への接し方を改善していくことが必要だろう、と本事業の取り組み意義を改めて再確認した。

(2) 活動の写真



保護者講習会（1回目）に集まる生徒・保護者



訪問指導者講習会 生徒・保護者へのアンケート内容を検討



家庭訪問指導 広範囲に点在する訪問先への移動は登山そのもの。



家庭訪問指導 子供の日記を確認する指導者。褒められて笑顔になる生徒。距離間は縮まってくる。



家庭訪問指導 2人の生徒を囲んで指導する2人の訪問指導者。左側は祖母。両親は離婚し、祖父母宅に預けられている。訪問により、学校では分からない課題も見えてくる。



家庭訪問指導 保護者と家の壁づくりをしていた生徒だが、作業を止め、日記帳を手近づいてくる。日中は肉体労働、夜はランプのない環境。家庭学習のハードルは高い。



保護者講習会(2回目) 非識字者の保護者へのアンケート実施。補助者が内容を読み上げる。



NGO・学校関係者・行政(村長)首長との合同会議 本事業と関連するネパール政策サイトを携帯電話で示すNGO関係者。彼ら自身で次のステップに踏み出す希望を感じる発言。

（３）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

本団体の代表は、カウンターパートである「DIYO FORUM」と共に、個人的にネパール支援を長年続けてきた。その間、現地の教育関係者から「学習に遅れがちな生徒の対応が難しい・改善したい」という相談を持ちかけられることがあった。調査や試行的な取り組みにより、家庭・保護者と学校との連携が改善の糸口になると分かったものの、家庭戸数も多く、複数の協力者が必要な取組になるため、個人的な支援の範囲では活動を広げることができなかった。しかし、今回の JICA 基金活用事業に採択されたことで、予算と期間のある教育プロジェクトを実施できるようになった。現地の支援対象範囲も学校から家庭や地域に広げられ、カウンターパートも行政との連携や他地域への波及を含めた広い視点で支援のあり方を考えることができるようになった。大きな一歩であった。

日本でも、今回の JICA 基金活用事業への応募を契機に、2024 年に任意団体「ディーヨフォーラム JAPAN」を立ち上げた。団体設立に伴い、ホームページも開設し、少ないながらも会員として協力してくださる方ができ、日本国内で報告会を開催することもできた（2025 年 8 月栃木県宇都宮にて実施）。報告会でいただいた意見やアドバイスは、今後の活動の大きな励みとなった。事業担当者の個人的な支援活動だったものが、組織的な支援活動に移行するきっかけとすることができた。JICA 基金及び支えてくださる皆様方に深く感謝している。